Japan Review 24　日本語要旨

The English and the Control of Christianity in the Early Edo Period
江戸初期におけるキリスト教禁制と英国

17 世紀初めの日本のキリスト教禁制の歴史についてはしばしば論じられてきたが、本論では、これまで知られなかった新資料を多く用いて、英国の影響という観点から再考してみた。日本はなぜ反カトリックに転じたのかについては、侵略される恐怖や文化の違いなど様々な要因が挙げられてきたが、オランダ・ファクターが低いことについては大方の意見が一致している。オランダが神学論争に関与することはほとんどなかったからである。一方 1613–1626 年に日本に東インド会社の商館を置いていた英国の動きについては、これまで目が向けられることがなかった。東インド会社の記録を調べてみると、英国は、自分たちはキリスト教国ではあってもカトリックではなく、当然イエズス会にも敵対的で、英国本国でも会を追放したばかりだといった広報を日本で熱心に行っている。東インド会社の日本商館長リチャード・コックスが、反カトリック勢力に雇われたスパイの前歴を持つことはほとんど知られていない。商才の評価が低い彼が日本に派遣された裏には、多分そうした消息が働いていたと思われる。そして 1616 年、手描きの絵や印刷画像を用いた反カトリック・プロパガンダを含む大量の宣伝ビラを積載した英国船が日本に入港し、その一部が江戸に送られ、幕府の主だった役職者たちに配布された。それは言葉だけでなくイメージの力によってイギリスがローマから離脱・独立したことを伝えようとする戦略に基づくものであったが、このビラ配布とほぼ時を同じくして、カトリック宣教師たちの最終的な追放が行われているのである。

Conduits of Power: What the Origins of Japan’s Earthquake Catfish Reveal about Religious Geography
パワーの暗渠：地震源としての鯰の起源が明かす宗教地図

地震の象徴としての巨大鯰は、19 世紀までには日本の通念となっていた。1855 年の安政江戸地震の後で何百種類もの鯰絵が作製されたのもその証である。本論は、こうした江戸の鯰絵から始めて時代を遡り、地震鯰という概念の起源を探り、その歴史的変遷を跡づけようとした試みである。その結果、日本における起源は琵琶湖の竹生島に、中国における起源は神秘的なハイブリッドの怪獣・山岳・水・島の広大なパワー・ネットワークに行き着いた。このように過去の多くの日本人の脳裡には、神的な力が、現代の送電網にも似たネットワークとして描かれていたのである。湖、川、海、地下水脈がその回路として、山や山容の島が中継基地として機能し、要石が変圧器のように、パワーを人間にふさわしいレベルに調節してくれた。ネットワーク・システムを守るのは、中継基地に宿る土着の神々である。この神的なパワー・ネットワークは、日本と中国を結びつけてもいた。その連結に大きな役割を果たしていたものの一つが、効験あらたかな中国のパワースポット、特に蓬莱で、それらが日本において複製・設定された。本論では、何世紀にもわたる土着化の過程を通じて、一見それと見分けのつかぬものになっている道教的要素が、日本宗教において有している重要性を強調した。

Loving Couples for a Modern Nation: A New Family Model in Late Nineteenth Century Japan
近代国家にとっての恋愛結婚：19 世紀後半の日本の新しい家族像

本論は、巌本善治（1863–1942）が主幹を務めた『女学雑誌』（1885–1904）誌上で展開された、結婚と夫婦愛をめぐる議論を考察したものである。この先駆的な雑誌は、西洋の恋愛に日本の前近代的男女関係にはない豊かさを認め、西洋風の恋愛を文明国にふさわしい唯一の恋愛形態として日本に移植する必要性について議論する場となっていたと考えられる。議論の趣旨は日本人にとっての近代的夫婦の理想的なモデルを確立することであった。巌本が求めたのは、革命ではなく、その後の日本が 20 世紀を通して模索していくことになる、夫婦の平等に基づく新しい家族モデルの基盤の構築であった。巌本の近代性は、その 1 世紀後に勝ち取られることになる最初の民法の編纂者たちの持っていた近代性に優るとも劣らぬものであった。

From “Literary Translation” to “Cultural Translation”: Mori Ōgai and the Plays of Henrik Ibsen
「文学的翻訳」から「文化的翻訳」へ：森鷗外とイプセン劇

日本の傑出した作家、翻訳家の一人である森鷗外（1862–1922）は、ヘンリック・イプセンの４つの戯曲――『ブランド』（1866）、『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』（1896）、『幽霊』（1881）、『人形の家』（1879）――を、それぞれ 1903 年、1909 年、1911 年、1913 年に日本語に翻訳している。『ブランド』第二幕の翻訳『牧師』において、鷗外はキリスト教に関わる箇所を全面的に削除しており、原作の本質が改変され歪められてしまっている。しかし『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』になると、イプセン劇の中心的なテーマは多少曖昧になっているきらいはあるものの、目につくような削除や改変はなくなっている。もっとも鷗外は、原作についての批評を、翻訳以外の場――鷗外自身の小説『青年』（1910）――において登場人物を変えて行っている。『幽霊』の翻訳方針は『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』と変わらないが、「幽霊」に焦点が集まるような訳しぶりである。ノルウェー語の原題“gengangere”は、「戻ってくるもの」という意味で、鷗外の「過去」と「歴史」一般に対する関心の深まりを反映しているようだ。本論は、「文学的翻訳」から「文化的翻訳」への移行という観点から、鷗外の翻訳上の苦心・工夫を中心に分析した。

Shinju fujin, Newspapers, and Celebrity in Taishō Japan
『真珠夫人』と新聞と大正期日本の有名人

本論は、柳原燁子をモデルにして書かれ、人気を博した菊池寛（1888–1948）の新聞連載小説『真珠夫人』（1920）を、実在の有名人とそのメディア表象という観点から論じたものである。柳原は、由緒ある華族出身の花形佳人で、白蓮の筆名で知られる歌人・作家でもあった。大正時代の読者にとって、『真珠夫人』のヒロイン瑠璃子が白蓮をモデルしていることは周知のことであったが、その後の文学研究者たちは、瑠璃子–白蓮の本質的関係や、有名人を扱うメディア文化が文学の創作に与える幅広い影響について十分な考慮を払ってこなかった。本論では、新聞に掲載された白蓮関係の記事、特に彼女の私生活を書き立てた 1918 年の連載記事「筑紫の女王燁子」を取り上げ、『真珠夫人』が、白蓮という当時の「スター」に対する読者の強烈な興味を巧みに利用しながら、女性のセクシュアリティーと主体性の問題を探求した作品であることを示した。瑠璃子–白蓮という読者の連想を基に、全国新聞紙上の現実の記事内容を絡めて、『真珠夫人』は読者に、華族と成金との階級違いの結婚、婚外恋愛、女性の「純潔」といった問題について、今一度よく考えるよう促した。またこの小説は、新聞記事やメディアの報道を作中に取り込むことによって、「真実」と「虚構」、及び新聞読者層の複雑化していく欲求という問題を自問するようにして探っている。本論の新しい論点は、この大正時代のベストセラーを、有名人関連の新聞記事やメディア表象のネットワークの一部として組み込んだところにある。『真珠夫人』は、自らを包摂するそうした社会的文脈を、逆に作品の中に有機的に取り込み、その意味を問い直している。

“A Living Past as the Nation’s Personality”: *Jinnō shōtōki*, Early Shōwa Nationalism, and *Das Dritte Reich*
「国民的人格としての生ける過去」：『神皇正統記』と昭和初期ナショナリズムとドイツ第三帝国

北畠親房の『神皇正統記』（1339）は、1930年代の日本において、当時に通ずる現代的意義を認められ、「国民教育のための標準的著作」とされた古典である。国体概念が集約された「民族的世界観」が顕れている点、また日本を天照大御神に始まる万世一系の天皇のしろしめす神国としている点が讃美された。そして日本はとこしなえに神います国であるという概念は神道自体の綱領とされた。1935年に『神皇正統記』を最初に西洋の言語に翻訳したヘルマン・ボーナーは、国体や神国といった神道の概念を予備知識のないドイツの読者に理解しやすくするために、アルトゥール・メラー・ファン・デン・ブルックの『第三帝国』（1923）を引き合いに出して説明している。ファン・デン・ブルックの思想、当時のドイツの社会的・政治的空気、さらにボーナーの政治的・神学的スタンスと比較対照してゆくと、『神皇正統記』が当時の時代風潮に対して持った意義、国民性についてのほとんど形而上学的な本質主義がよく理解できる。本論の成果は、『神皇正統記』に対する評価の変遷を明治初期からたどり、北畠の中で神道が実際に持っていた意義を分析し、ボーナーの比較的なアプローチを援用することによって、『神皇正統記』が昭和初期の日本のナショナリズムに対して持った重要性を解明したことである。

History in the Making: The Negotiation of History and Fiction in Tanizaki Jun'ichirō's *Shunkinshō*
作られる歴史：谷崎潤一郎『春琴抄』における歴史とフィクションの狭間での思量

本論では、これまで谷崎文学に対する批評・研究の常道であった、作品を執筆時の歴史的文脈において解釈するというアプローチを継承しながらも、さらに一歩を進めて、谷崎自身が作品の中で歴史というテーマにどのように向き合い表現しているかを、特に『春琴抄』（1933）の幾つかのパッセージを精読しながら考察してみた。一つは、『春琴抄』の中に出てくる春琴の写真に着目し、写真に纏わる社会的・経済的要素が、谷崎が現実と虚構の緊張関係をどのように表現するかを決める一つの契機になっていることを示唆した。また春琴と佐助の盲目という設定には、歴史的現実によって形成された世界から逃れようとしても結局は奏功しないという谷崎の思い入れも働いている可能性を論じた。1930 年代初期のしだいに国家的統制が強まってくる社会的・経済的環境の中で、谷崎が現実を逃れるために美の世界に目を向けたと考えるのは妥当ではないだろう。むしろ美への傾倒は、時代の潮流に対する谷崎の深い文学的関与を理解する上での重要な鍵となる。その関与は、谷崎と同時代の日本浪曼派の主要な作家たちの関与よりも、はるかに力強く意義深いものになっている。

The City and the Chain: Conceptualizing Globalization and Consumption in Japan
都市とチェーン企業：日本におけるグローバリゼーションと消費の概念化

グローバリゼーションとボーダレス化した消費の進展に伴って、新しい社会的・経済的・文化的地図が描かれるようになった。その最も目覚ましい現象の一つが、経営とブランドの双方の次元で世界各地を「連動させる」グローバル・チェーン企業の増加である。世界的な規模でチェーンが形成されるということは、物質としての商品とともに、イメージや文化的表象が世界の様々な土地を巡り、 それによって新しい結合が生じることを意味している。本論では、グローバル・チェーン企業が日本の都市の消費文化をどのように変えてきたかを中心に考察する。日本のスターバックスをケース・スタディとして取り上げ、スターバックスが、日本の消費者の心を捉え、社会的・空間的要求を満たすために、チェーン全体で蓄積した経験をどのように生かしているかを分析した。グローバル・ブランドのどこがローカルな文脈において価値を持つのか、グローバル・ブランドと消費者が出会うことによってどのような新しい人間的主体が生まれるのかといったことを問題意識として、消費経験の中の様々な要素に着目し、その社会的・文化的意味をたどることによって、現代日本の都市における新しい人間的主体の創出とアイデンティティ形成のプロセスについての結論を導いた。